

tact_web_interview

清田直博さん

一橋大学経済学部卒業後、三菱重工業に勤務。退社後、武蔵野美術大学大学院基礎デザイン科修士課程修了。ギャラリーMOGRAを運営後、Media Surf Communicationsを経て独立。広告・恋する芸術と科学 編集員、NEXT WISDOM FOUNDATION 編集長など、クリエイティブの現場で経験を積む。3.11後は仙台の農家で復興支援を5年。後に檜原村に移住し農地取得、檜原村役場に勤務。退職後、山のサブスク「MOKKI NO MORI」、関係人口コミュニティ「Village」をスタート。

取材日時 2025年2月20日

豊かさの新しい定義—自分で手を動かすことの価値

現代社会における「豊かさ」は、単なる経済的な成功や物質的な充足では測れません。豊かさとは、社会との距離感の取り方、家族との触れ合い、仕事の量、生活上のさまざまなDIYスキル、そして美意識。これらの要素が織りなすバランスの中にこそ存在します。都市での暮らしは、人間が本来行うべき多くの労働を「外注」しているようなものです。一方で田舎では、外注先がなく、日常的に自分の手で解決しなければならない場面が増えます。これは「お金を経由しない労働」が増えることを意味しますが、その分、自らのスキルや経験値が活き、災害時にも役立つ能力が養われます。

こうした手仕事や季節ごとの営みによって、自然の流れを知り、自分がどのように支えられ、生かされているのかを実感することができます。それは単なるサバイバル能力ではなく、心の安心感や本当の意味での豊かさを得るための方法ともいえるでしょう。

定着には時間がかかる—ライフスタイルの「実験」を積み重ねる

新しいアイデアや仕組みを社会に定着させるには、時間が必要です。たとえば、ファーマーズマーケットやコワーキングスペースのような取り組みも、導入当初はほとんど知られておらず、10年以上かけて少しずつ認知されてきました。私自身も二拠点生活というライフスタイルを試し始めて約10年が経とうとしています。この時間を通じて確信したのは、複数の拠点を持つことが、大きな社会問題に立ち向かうための一つの手段になり得るということです。

都市と田舎、どちらか一方にとらわれるのではなく、両方を行き来しながら自分なりのライフスタイルを模索すること。それは個人の問題解決だけでなく、地域や社会全体の新しいあり方を実験的に模索する行為でもあります。このような「ライフスタイルの実験」を通して、次の世代が参考にできるモデルを作りたいと思っています。

日本の未来—格差、変化、そして希望

これから日本は、社会的にも経済的にも楽な時代にはならないでしょう。格差の拡大、人口の減少、そして外国人労働者の増加。これらの課題は避けられない現実です。インバウンド需要で盛り上がる一方、たとえば北海道の一部地域では、外国人がコミュニティの形を変えていく現象も見ら

れます。文化を守りたいと願う人々と、それを経済的な視点で合理化しようとする動きとの間には常にせめぎ合いがあり、そのバランスをどう取るかが大きな課題となるでしょう。

一方で、田舎での暮らしに目を向ける若い世代が増えてきているのは希望です。都市で疲弊している人々が田舎に移り住み、生活の質を向上させる。この流れを加速させることができれば、過疎化や地域経済の停滞といった問題にも一定の解決策が見えてくるはずです。ただし、この流れを持続可能にするには、田舎に移ることへのハードルを下げ、移住先での生活スキルや仕事の選択肢を提供することが不可欠です。

視野を広げるために—オルタナティブを示すことの重要性

多くの人々が現在の生活に閉じ込められ、本当の選択肢を知らないまま日々を過ごしています。都市で疲れ切った人々が田舎に目を向けることができれば、視野が広がり、生き方の選択肢が増えます。しかし、情報が届かず、生きるためのスキルが欠けているために一歩を踏み出せない人も多いのが現状です。そのため、オルタナティブなライフスタイルを積極的に発信し、選択肢を可視化することが大切です。

たとえば、空き家が増え続ける中で、なぜ新築を選ぶのか。地方で暮らす選択肢があるのに、なぜ都市に留まり続けるのか。こうした問いに答えるためには、資本主義的な価値観から少し離れ、「安心感」や「豊かさ」の再定義を示す必要があります。

私自身も、以前は都市部の一般的な会社員として働いていましたが、途中で立ち止まり、「人生これだけではない」と気づきました。その一歩を踏み出すのは簡単ではありませんが、変わるきっかけをつかむことができれば、生活の質は大きく変わります。たとえ動き出すのが50歳になってからでも、遅すぎることはないのです。

「変な大人」との出会いがもたらすもの

変化を促すためには、「変な大人」と出会うことが大切です。多くの人は、会社や社会の中でロールモデルを作りがちですが、その枠組みの外にいる「変わった」人と出会うことで、新しい価値観や生き方を知るきっかけを得られます。

これは、単にオルタナティブを知るというだけではなく、「そうした生き方が可能なのだ」と認識することが重要です。変わりたいと思いつつも、その選択肢が見えていないだけという人が大半です。だからこそ、こうした「変な大人」が示すモデルを通じて、変化の可能性を広げていきたいと思います。

「場」をつくるということ—自然と人をつなぐ媒介

私が田舎で行っている取り組みは、仕事の概念を広げ、季節の仕事を体験してもらうことです。たとえば、盆栽や川遊びといったプログラムを通じて、自然の流れや食べ物の季節性を感じる機会を提供しています。これらは、単なる娯楽ではなく、自然がもたらす豊かさや、最低限生きていくために必要な知識を学ぶ場です。

「場」をつくることは、都市や田舎にとどまらない新しい生活のあり方を提案するための重要なステップです。「自然と人をつなぐ」「社会課題と個人をつなぐ」。こうした場が生まれることで、人々の価値観が変わり、豊かさの定義が多様化していくでしょう。

新しい豊かさのために—変化を受け入れる社会へ

最終的に、社会が変わるためにには一人ひとりが自分の価値観を問い直し、新しい豊かさを受け入れる必要があります。それは、資本主義的な安心感に縛られた生き方を手放すことでもあります。火を見つめる静かな時間、自然に浸る日々。こうした「無」の瞬間が、変化への土壌を育むのではないでしょうか。

私たちが目指すのは、答えのない問いを投げかけ続ける場をつくること。そこに集う人々が、自らの選択肢を見つけ出し、次の一步を踏み出せるきっかけを提供することです。都市と田舎、そのどちらでもない新しい「豊かさ」のかたちが、そこから生まれることを信じています。

(聴き手:本村拓人、酒井一途)